

オンラインコーチング研究第9回

ハンドボール男子日本代表チームの合宿を見て気がついたこと

1 2004 ハンドボール日本代表チームの練習を見学して感じたこと「一事に一指示の原則の徹底」

岩手県花巻市総合体育館でハンドボール男子日本代表の公開練習があった。キャプテン中川の指示は短局的確であった。1つプレーをやってダメなら、プレーを止めて全員に1つだけ指示をしている。多くの指示を出さない。「**オレが言いたいのは、〇〇ってことだけ！ わかる？ わかったらそうやってくれ！**」の〇〇の部分を変えて指示を出していた。小学生にも「一事に一指示」というのがあるが、日本で一番ハンドボールがうまく、体が自由自在に動く選手に対してさえ、「一事に一指示」だったことに大変驚いた。コート上にいる選手は(たとえそれがどんなにタフでハンドボールが上手な選手であろうとも)、監督やコーチから複雑な指示を受けたとしてもほとんど理解できない状態にあるということだろう。

2 「授業や試合は見る能力のある人だけに見える」ということ

ハンドボールは攻防がとても早い。フェイントやスカイプレーにおいては、ボールを目で追っていると見失うほどだ。本当は人の動きを見るといいらしい。私には、攻防の中の人動きがよく見えていない。ハンド歴の長い人の中には、他人のプレーでも自分のプレーでも、その瞬間の数人の動きを、試合後、克明に語って分析している人がいる。見える人には状況が見える。

授業も同じらしい。教師なのに「らしい」とは心もとない話で恐縮だが、授業も授業の達人になると見える「授業の立ち会い勝負」というのがあるらしい。達人になると、授業の立ち会い勝負をするらしい。これは何も勝ち負けを決めるのではなく、「オレならこうする」というのをライバル同士の見ている前で授業をするそう。いわゆる一般に公開される「授業公開」のことだが、これも見える人だけ授業の工夫、流れが見えるそう。それで見えない人には授業技術がまったく見えない。あまりにもスムーズで当然のように授業が進行しているため、そこに使われている技術が見えない。

コーチング(指導)とは、そんな面を持っているようだ。オリンピック選手を出した指導者とか、インターハイなどで何連覇もしている監督などの指導とは、あまりにも平凡で何も目立ったことがなく自然に見えるのかも知れない。しかし、そこにはおそらく何日も眠られない不安や、胃に穴があくような苦労、大金を投資してのコーチング留学などの刻苦勉励があるのだろう。

高校サッカーで初の三冠達成した志波監督の本を読んだり、ラグビーの山口良治監督の講演テープを聞いたりすると、練習見学に来る人は誰もが「ここで本当に練習をしているのですか？」と驚かれるとのこと。それを可能にする何かがあるのだろう。見える人には見えて、見えない人には見えないのかもしれない。